

# わかりやすい授業が本当に良いのか。自問自答しつつ、生徒に社会人基礎力を身につけさせる指導を実践。

「ティーチャーよりも、コーチ的立場で生徒をサポートしたい」。岡武志先生はそう言う。  
全国規模の勉強会にも積極的に参加して情報を収集し、生徒たちに新たな風を送り込む努力も惜しまない。

イケてる  
センセー!!  
vol.18



三重・県立伊勢高校  
教諭  
岡 武志先生 (41歳)

## profile

1974年三重県生まれ。三重・県立宇治山田高校卒。筑波大学第二学群生物学類卒、筑波大学大学院教育研究科修士課程修了。三重県立鳥羽高校4年、宮川高校5年を経て08年度より伊勢高校へ。赴任当初から7年間、進路指導部・主事を経験。同校は2012年度より文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校を受けているが今年から岡先生がSSH主担当に。教科は生物。バレーボール部顧問。

## 考える「時間」「ヒント」を生徒に与えるのが教師

伊勢高校に赴任し、進路指導を担当してから、自分なりのキャリア指導を考えるようになったと言う岡先生。「それまでキャリア教育とは何かと向き合った経験がなかったので、情報収集のため、三重県の進路指導の勉強会や全国のセミナーに参加しました。そこで出会った他校の先生方の意見を聞くうちに、短絡的な大学選びではなく、その先の人生のために今何をすべきかという視点を、生徒がもてる指導が必要だと痛切に思うようになりました」

具体的には「総合学習」のプログラムにその思いを反映させている。1年次には研究者による講義などを実施。2年次は「探求」として一人ずつ自由にテーマを決めて研究に取り組んでもらい、論文を作成してプレゼンを行う。3年次には「志望理由書」を作成。「課題解決型の学習を経験することで答えのない社会へ出て答えのない問題を解決する力を身につけてもらうためです」

進路に携わるようになり、教科指導の方法もずいぶん変化した。「生徒に宿題や課題を与え、何でも手取り足取り教えることが果たして彼らのためになるのか。自主性を奪っていないかと。課題をこなすことは基礎学力を身につけるうえで大切ですが、学習イコール作業にさせてしまっていないかと疑問に思い始めたのです。極端な話、わかりやすい授業がはたして本当にいいのかとも思えてきて。それで、生徒に答えを言うのではなく、彼らが考えるためのヒントを提供するようにしています。アクティブ・ラーニングを取り入れたのもそのためです」

岡先生自身、生物を好きになったのは授業だけでなく、NHKの人体に関する番組や生物科学雑誌などを読んだからだった。「生物はこれからどんどん発展する学問だと知りワクワクしてこの道を選びました。自ら学ぶ喜びを今の生徒たちにも味わってほしい。授業でわからなかった答えを、生徒が自分で調べてしまうような、そんな授業を日々目指しています」

## 「教える」のではなく「支える」コーチでありたい

気づきへと導く教育。それこそがまさに岡先生の目標だ。「生徒に教えるを説くよりコーチとして生徒を支援するのが大好き。彼らが自分で社会人基礎力を育成するサポートを続けたい」と言う。説教じみたことを生徒に言わない。ただ「人生、無駄なものはないよ」と時折話すことはある。

「多少嫌だな、面倒だなと思うことでも引き受けて実際にやってみると、それが後々生きて、必ず糧になる。僕自身、そうでしたから」

自分のためになることは一生懸命やるけれど、自分には関係ないと思うことをやらない生徒が気になる。「うちの子には苦勞させたくない」と効率的な人生を選ばせようとする保護者もいる。

そこに警鐘を鳴らすのもまた教師の仕事ではないか。岡先生は自身の思いをベクトルにして「本当の意味で生徒のためになること」を模索し続ける。



岡先生が現在、担当するSSHの授業の様子。写真は1学年の「基礎実験講座」。SSHでは生徒自身がテーマを見つけ、仮説・実験方法等を考え、指導教員がサポートする。

## fan message



強い芯をもち、周りを巻き込みながら何ごとこなしていくスーパーティーチャー。

アクティブ・ラーニングを自ら実行し、先の先を見通した授業を毎日展開しています。3年間の進路指導部主事の経験を生かし、今年度からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の担当に。これからの三重県の教育を背負っていく人材だと期待しています。（三重県立伊勢高校校長・松井慎治先生）